

と、ある先輩の先生に話した。

そのとき、その先生から、「なるほど、それでは、小学生の子どもを持つ親の気持ちはどうですか。わかりますか」

と尋ねられた。どきつとした。答えられなかった。

さらにその先生から、こう教えていただいた。

「あなたの娘さんが小学生になったとき、わかるようになるでしょう。今は、まだ経験してないからよくわからないと思います。でも、経験してないからこそ、何とか先取りして考えることが大切ですよ」

なるほどと思った。

娘もやがては、小学生になる。そのとき、自分は何を考えるだろうか。友だちと仲良くしているかとか、勉強はどうだろうかとか、担任の先生との関係を心配したりするに違いない。

もし、娘のものの覚えが悪かったらどうしよう。根気よく、ていねいに教えてもらえたらよいだろうな。

そうやって先取りして考えていくと



親の気持ちも見当がつくし、今自分がどんな指導をすればよいかわかる。

教師として、立場の違う親の願いや気持ちを取っていき、容易ではないだろう。しかし、それによって子どもの気持ちもわかってくれ、やれるような教師になれるのではないかと。

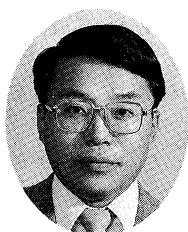
娘は、笑ったり泣いたりしながら、一日一日確実に成長している。私も教師として、そのように成長したい。

(鯉川村立鯉川小学校教諭)

ソフトとの

出会い

平野茂穂



「先生、ノックできますか」部の顧問が決まった直後の部員の言葉である。県大会優勝を目指すチームにとって、監督が誰になるのかは最も関心のあることだし、心配ごとだったらしい。私はどちらかという運動音痴であり、運動部を引っ張ってきた体験に乏しく、ソフトボールのルールは全く知らない。それがどうしたことか、ソフトボール

部の顧問を引き受けることになった。

練習の初日「先生、ノックをお願いします」主将が職員室に迎えに来た。

どうしようかと思いつながら重い腰をあげ、グラウンドに出ると、基礎トレーニングを終えた部員が配置についていた。皆無言である。ノックバットを握りホームベース付近まで行くと、期せずして拍手が起った。そして、「お願いします」元気な声がグラウンドに響いた。こうして部員との出会いが始まった。

ノックを受ける選手の姿は実に生き生きとしている。どんな打球に対してもしっかりと返す。素人の私が始めから上手にできる訳がない。しかし、あのおとなしいA子もB子も積極的に身体を動かす。ボールに食らいつく。捕球に失敗すると周りの者が「ファイト」と声をかけてやる。下級生がうまくできないと、三年生が「○○さんがんばれ」と励ましてくれる。実に雰囲気が良い。補助をしている三年生が、小さな声で「先生、もう少し右の方へボールを打ってください」「もう少し強いゴロにしてください」と選手の動きに応じてアドバイスを送ってくれる。送球がそれてボールがグラウンドを転がる。すかさず「○○さん、もっと速くカパーに入ってください」と今度は大きな声で教えてやる。皆役割が決まっています、タイミングよく声を掛け合い、確かめ合いながら練習に取り組んでいる。

初練習が終わった後、主将の日子が、

「先生ありがとうございます」と丁寧にあいさつをし、さらにほほえみながら小さな声で「先生、身体には十分注意してくださいよ」とセリフを残し、グラウンドの整地に取りかかった。部活動をどうしようかと心配していた私の気持ちは、一べんに吹き飛んでしまった。自分なりにできることを、生徒と共に本気でやろうとする意識になっていく。目標は、県大会優勝である。

今日もまた、グラウンドには生徒の元気な掛け声が響いている。県大会では緒戦を突破できなかったが、また優勝を目標に新しいスタートを切った。夕方五時過ぎ、新しく主将になったS子が「先生ノックをお願いします」と呼びに来た。主将としての意気込みが伝わってくる。その時、どうしたことか、前の主将であったH子が、県大会から帰ってきた時に言った言葉が脳裏に浮かんだ。「先生、負けてしまってます。本当にありがとうございます。今度は、できるだけお手伝いをさせてください」

部活動の指導を通して、教えられる

